

おうち時間で実篤を知ろう >> 旧武者小路実篤邸ってどんなところ

。5月8日（金）掲載

【#おうち時間で実篤を知ろう 旧邸編】

今回からは「おうち」つながりで、実篤のおうち「旧武者小路実篤邸」に注目。当館発行の解説シート「もっと知りたい武者小路実篤」55～57と、掲載しきれなかったエピソードを交えて紹介していきます。

【#おうち時間で実篤を知ろう 64】

もっと知りたい 55 おもて面から。実篤の邸宅は65年前に建てられました。今では草木に埋もれていますが、当時の写真ははまだ空が広いですね。邸宅は平成30年11月に国の登録有形文化財となりました。

55 もっと知りたい 武者小路実篤

仕事もして生活もする せんがわ 仙川の家

■70才で建てたマイホーム

自ら歩いて土地を探し、建築家を決め、自分の仕事や生活に合わせて一から家を作ることになりました。昭和30（1955）年7月21日には、建設中と完成後も建物が無事であるよう願う「上棟式」が行われました。

昭和30（1955）年7月21日

木の柱、土の壁、瓦屋根のように日本に古くから伝わる「木造住宅」でありながらも、テラスや天窓を作るなど、当時としてはモダンな家でした。この家を設計した建築家・山口芳春は、もともとある自然が美しく魅力的だったので、自然に馴染む家を作ることを心がけています。

武者小路実篤氏の家
建築家 山口芳春
DESIGNED BY S. YAMAGUCHI
YAMAGUCHI ARCHITECTS, TOKYO, JAPAN

建築の専門雑誌に取り上げられました！

「...ここにつくった小さい家を、僕は仕事場と呼び、お客を呼ぶのが目的でなく、自分の仕事を完成するの目的にしたいと思っています。」
（一人の男）二五〇巻 昭和48（1973）年 より



実篤は「水があり、土器がでて、土筆の生えるところ」にいつか住みたいと常々思っていました。大きな二つの池が気に入ってこの土地に決めましたが、水のあるところは昔から人が住むのに適しているので、土器も出て、武蔵野の自然が豊かなことから土筆も生えていて、図らずも夢が叶った土地だったのです。



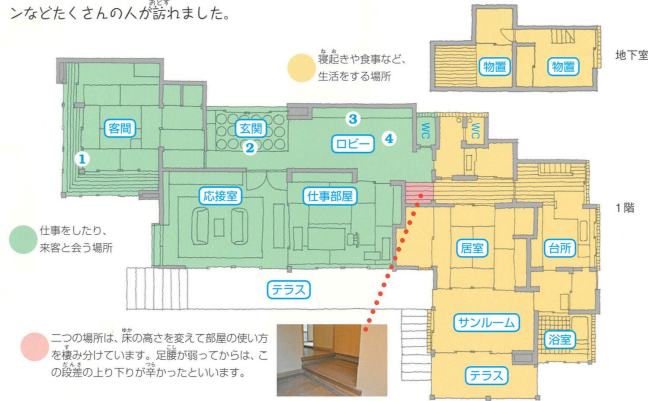
。5月9日(土)掲載

【#おうち時間で実篤を知ろう 65】

もっと知りたい55うら面は「ひとつの家で仕事と生活をする工夫」。間取りで注目していただきたいのは、隣り合った二つのトイレ。段差の上と下の一つずつあり、来客用と家族用にわかれているのです。

■ひとつの家で仕事と生活をする工夫

実篤と妻・安子は、昭和30(1955)年12月20日に三鷹市・牟礼から引っ越します。京王線の仙川駅に近いことから「仙川の家」と呼び、本の編集者や絵を売る画商といった仕事の来客だけでなく、友人やファンなどたくさんの方が訪れました。



■これなあに? 実篤の思いと建築のこだわり



1 妻を思った
部屋作り

竹の格子にあげひのツルを巻いた、茶室によく見られる窓です。茶道をたしなも妻を思って作られた和室にあります。



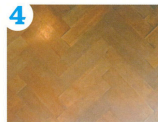
2 まん丸模様の
靴めぎ場

初め、白っぽい石と石の間は真っ黒でした。正反対の色、丸い形を18個も並べる点に、モダンな雰囲気を感じます。



3 明るい家に
住むために

日光が当たりにくい北側にも窓があり、太陽の光が入る明るい家に住みたいという実篤の思いが込められています。



4 職人の技術が
つまった床

木を隙間なく組み合わせる「寄木」という方法で作られ、仕上げにロウを塗り、拭き取ることでツヤをだしています。



パブリックスペースとプライベート空間を分ける段差は板の目も変えるこだわりです。来客は玄関に入ってすぐにあるロビーで待つこともあったので、当時は椅子が置かれ、壁には美術品が飾ってあり、小さなサロンのようでした。ロビーの正面、実篤肖像の右にちょっと見えるのが来客用トイレの洗面台です。



おうち時間で実篤を知ろう >> 旧武者小路実篤邸ってどんなところ

◦ 5月10日掲載 (日)

【#おうち時間で実篤を知ろう 66】

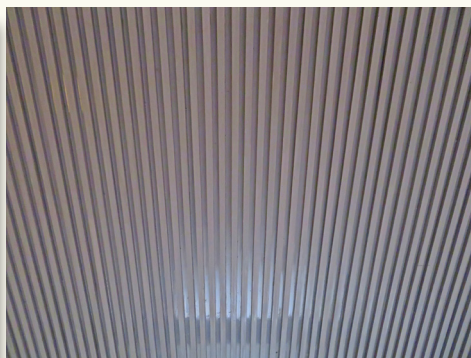
旧実篤邸の意匠を見比べましょう。丸い石が規則的に並ぶのは三和土(たたき)。木の床は、長方形の板を緻密に組んでいます。耐震工事の際、解体すると組み直すことはできないと言われた職人技なのです。



写真1枚目から右回りに敷石、軒、土壁、ベランダの床です。

細かなところまでこだわりがあるのですが、難問すぎて解説シートには掲載できませんでした。土壁とベランダの床は耐震工事で解体していますが、できるだけ建設当時と同じ材料、同じ技法で作直しています。建築の技術を残す場でもあるのです。

現在、実篤公園は休園中です。再開園した時にはぜひ探しに来てくださいね。



玄関の外で下を見ると敷石、上に軒があります。土壁は邸内全体で見ることができます。ベランダの床は、皆さんがガラス窓越しに邸内を見学する場所の足元、一見ただのコンクリートに見えますが、細かな砂利の色がこだわりです。



。5月12日(火) 掲載

【#おうち時間で実篤を知ろう 67】

もっと知りたい 56 おもて面は、実篤のおうち時間の過ごし方。午前中は原稿を書いて過ごしました。実篤は、電気の灯りよりも陽の光で仕事がしたいと思っていたので、小さな文机は窓の方を向いています。

56 **もっと知りたい**
武者小路実篤

仕事場としての—
せんがわ
仙川の家

■ **実篤のひと月の予定**
これは、昭和32(1957)年2月に使っていたカレンダーです。下のメモ書きをのぞいてみると、個展に出す画の締め切りや講演会、友人との座談会など、71才の実篤にはたくさんの予定が入っていたことがわかります。

「僕は朝は原稿をかき事にし、午後は原稿はいっせいで書かず、画をかき事にしている。」
【毎日の生活】(『私の美術道程』 昭和49(1974)年 より)

■ **実篤の一日…午前**
今のようにパソコンなどはないので、小さな文机の上で、原稿用紙に一字ずつ手書きしました。

このお気に入りの机を描いた画には「愛用の机」という題名がついています。

【愛用の机】 昭和44(1969)年

■ **どうして午前中に原稿を書くの?**
「原稿の方は隣りから話し声が聞えると、どうしても精神統一の邪魔になる。それで僕は午前中は原稿をどりに来る人以外は面会謝絶をたてまなしている。」
【毎日の生活】(『私の美術道程』 昭和49(1974)年 より)



今の旧実篤邸の写真、左に文机と座布団があります。この部屋は、原稿を執筆し、絵を描いた仕事部屋。そう考えると、実篤の場合はおうちで仕事をしていたので、ある意味、在宅勤務と言えるのかもしれません。



◦ 5月13日(水) 掲載

【#おうち時間で実篤を知ろう 68】

もっと知りたい56うら面、硯や筆が置かれた大きな机では絵を描きました。実篤が住んでいた当時は、野菜や花、人形や工芸品、貝殻、能面などが床まで置かれていました。今もいくつかは邸宅に残っています。

■実篤の一日…午後

仕事部屋には、画のモデルとなる野菜や花、人形、壺などが所せましと並んでいます。椅子に座って大きな机に向かい、硯で墨をすり、和紙に筆で「淡彩画」を描きました。



昭和36(1961)年



多結巻と蜜柑 昭和44(1969)年

あれれ？硯に穴があいているよ

病気で幾日も旅行で描くことができないとき以外は、いつも画を描いていた実篤。毎日毎日、墨をすり廻けたので、とくなる半年ほど前にとうとう底をすり抜けてしまいました。

木の枠に布をはったキャンバスに、筆と油絵の具を使って画を描く「油彩画」にも取り組みます。また、昔の芸術家が作った美術作品を鑑賞し、日々、楽しみました。



昭和31(1956)年 油彩画のモデルは妻・安子



「僕は自分が今いる処は仕事場と称して、朝から晩まで、原稿をかくか画をかくかしているわけだ。それが楽しいのだから仕方がない。」
【毎日の生活】(私の美術鑑賞) 昭和49(1974)年より 昭和30年代



仕事部屋の隣は応接室です。画集や美術品が並ぶ棚があり、油絵を描くこともありました。本棚には西洋美術から東洋美術まで様々な本が並び、壁には絵画作品がかけられています(現在は複製を飾っています)。実篤はここで、たくさんの友人や仲間と会い、時に読書会などを行いました。



おうち時間で実篤を知ろう >> 旧武者小路実篤邸ってどんなところ

◦ 5月14日（木）掲載

【#おうち時間で実篤を知ろう 69】

仕事部屋の絵を描いていた机に近い畳、なんだか汚れています。よく見ると青や緑、赤色の絵の具。実篤がはねかしたのです。これも実篤がいた痕跡、重要な資料なので後世に大切に残していきます。



旧実篤邸を永く残していくため、年に2回、学芸員とボランティアで大規模な清掃を行っています。今年は休園中に職員で行い、床や家具だけでなく、人形や本、障子や窓の棧など、普段は手の届かない隅々まで積もった埃を払いました。建物や展示物に異常がないか点検し、気になることは記録しています。



◦ 5月15日（金）掲載

【#おうち時間で実篤を知ろう 70】

もっと知りたい 57 おもて面、実篤が生活していた部屋を紹介しています。居室の奥は太陽の光を取り込む天窓があり、明るいサンルームです。光量が調整できるよう窓の内側には小さな障子があるんですよ。

57 もっと知りたい 武者小路実篤

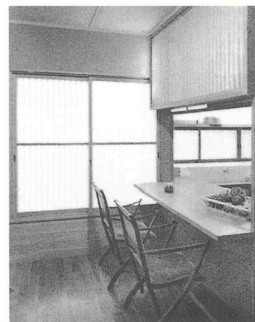
生活の場としての— せんがわ 仙川の家

暮らしのための部屋



【居室】

寝起きし、食事をとり、テレビで相撲を観戦したり、訪ねてきた娘や孫とのひとときを楽しむ部屋でもありました。



【台所と食卓】

台所の横にあるカウンターテーブルで食事ができるよう作られました。実際には居室で食べていたといひます。



【浴室】

窓が多く、広いので、冷え込む冬は寒かったそうです。



【地下室】

階段を下りると物置として利用された小さな地下室があります。炭の束や、妻・安子の手作りの梅干しなどが置かれました。



「調布に住むようになって、僕は初めて自分達の家に住んだ気がした。二人だけで住んだので、誰にも神経をつかう必要はなかった。僕達老夫婦にとって、この事は実に自然であった。」
【一人の男】二五二章 昭和46（1971）年 より



おうち時間で実篤を知ろう >> 旧武者小路実篤邸ってどんなところ

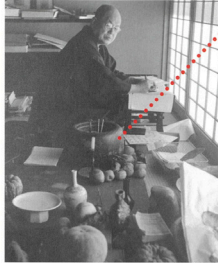
◦ 5月16日掲載 (土)

【#おうち時間で実篤を知ろう 71】

もっと知りたい57うら面、旧実篤邸に残るちょっと昔の道具を紹介。今ではあまり見かけない木製の雨戸は、留め具も木製。風を通すための格子もついていて機能的です。

■ ちょっと昔の道具

実篤が仙川の家に暮らした昭和30(1955)年から51(1976)年頃は、身のまわりの道具が今とはすこし違いました。日々、夫婦が使っていた生活の道具を紹介しましょう。



【火鉢】

鉢の中に炭を入れ、その上に、火をつけた炭を置いて暖めます。「火釜」という釜でできた箸で炭を扱い、使わない時は炭に刺しておきました。



【鏡】

「鏡を鏡」とも言い、先を炭火で熱し、着物を縫う時、布に折り目や印をつけるなど小さなアイロンのように使いました。



【雨戸】

今は金属が多くなった雨戸ですが、当時はほとんどが木製でした。実篤は、朝起きると自分で雨戸を開け、仕事に取りかかりました。



【米櫃】

米を保存する容器で、下の口に蓋がついていて、米を出したい時は蓋を上げ、下げると止まる仕組みです。仙川の家の米櫃は、釜蒸籠に収納できるのが特徴です。



旧実篤邸の米櫃(こめびつ)は、備え付けの食器棚の引き出しに組み込まれています(棚の写真の右下)。備え付け家具は建物と一体化していて移動ができないことから、建て替えなどがあった時に民俗文化財として残すことが難しい一面があります。建物がまるごと保存された旧実篤邸ならではの資料ですね。

ちょっと見にくいですが、米櫃(写真右)の引き出しを覗いてみたら、こんなになっていました。右から左にむかって傾斜になっていて、お米が流れていきます。



おうち時間で実篤を知ろう >> 旧武者小路実篤邸ってどんなところ

◦ 5月17日(日) 掲載

【#おうち時間で実篤を知ろう 72】

どの写真を見ても大きな窓がある邸宅は「明るい家に住みたい」という実篤の希望で建てられました。家族や友人、仲間たちが集った家。再開園となりましたら、実篤の家を訪問する気持ちで来てくださいね。

写真1枚目から、右回りに、応接室、客間、居室、洗面台とお風呂。

実篤の家を訪ねたことがある人に話を聞くと、当時は玄関の靴箱の上に木の板と棒のような叩く道具が置いてあり、コンコンと叩いて訪問を知らせたのだそうです。こうした記憶も受け継いでいきたいですね。



おうち時間で実篤を学ぼう旧邸篇の最後に、旧実篤邸のおしゃれな電気をちょこっと紹介させてください。



写真1枚目より、右回りに、洗面所、お風呂場、和室、水屋(和室の入口)。

